

公爵令嬢が婚約破棄をするために

王太子殿下にハニートップを仕掛けた結果

目次

公爵令嬢が婚約破棄をするために
王太子殿下にハニートリップを仕掛けた結果

5

番外編 一番好きな香り

279

公爵令嬢が婚約破棄をするために

王太子殿下にハニートラップを仕掛けた結果

第一章 消去法で決められた婚約者

「ティナ、とても綺麗だよ」

「ハビエル殿下が素敵なおドレスを贈ってくださいましたからですわ」

今夜のマルティナは、婚約者であるハビエルが特注したブルーのドレスに身を包んでいる。全体に細かいビーズで花の刺繍がなされていて、一目で豪華とわかる代物だ。

「またそんな謙遜を。美しい君を前にしたら、どんなドレスもどんな宝石も色褪せるさ」

ニコリと微笑んだハビエルを見て、マルティナは『美しいのは殿下の方だ』と思っていた。

月夜に輝く金色の髪はセクシーにゆるくカールがかかっており、鼻筋はスツと通り、海のように深い青の瞳に見つめられると吸い込まれそうだった。顔だけでなく、均整の取れた身体は男性らしい逞しさと美を兼ね備えていた。

そんなこの国一の美丈夫に容姿を褒められても、気を遣って世辞を言ってくれたのだとは思えなかった。それなりに整った顔立ちではあるものの地味で大人びている自分は、華やかな彼と並ぶと見劣りするから。

「さあ、そろそろ行こうか」

「はい」

ハビエルに差し出された腕に、遠慮がちに触れてエスコートを受けた。平静を装ってはいるが、実は心臓が騒がしく音を立てている。こんな僅かな触れ合いだけで戸惑っていた。

二人は婚約をしているが、互いの両親が決めたものだ。なのでいくら良好な関係であっても、エスコートやダンス以外で触れ合ったことはなかった。

「キヤー！ ハビエル殿下だわ」

「今夜も素敵ねえ」

「一曲踊ってくださいませんかしら」

舞踏会の会場に入ると、どこからともなく若い令嬢たちの色めきだった声が聞こえてきた。憧れのハビエルをうっとり見つめる視線と共に、傍にいるマルティナには明らかに悪意のある視線を注いでいる。

「どうしてマルティナ様なのかしら？」

「そりやお父様が宰相で、公爵令嬢だからよ。他に釣り合う人がいなかったから、消去法で決まったって話だわ。だって彼女の良いところなんて身分しかないじゃない」

「そうよね。魔力量なんて子どもレベルなのに、よく殿下の婚約者でいられるわよねえ」

「本当だわ。殿下はこの国一の魔法使いですものね。私がマルティナ様なら恥ずかしくて婚約を辞退するわ」

令嬢たちは扇子で顔を隠しながら、こちらを見て笑っていた。ひそひそと……だが、確実に聞こ

える音量なところがたちが悪い。

——今夜の舞踏会はお父様が不在だから、態度があらさまね。

マルティナはこの程度の暴言には慣れていた。ハビエルと婚約発表をしてから、舞踏会の度にこの調子だからだ。宰相の父や優秀な魔法使いである兄姉がいる場合は大人しくしているが、ろくに魔法が使えないマルティナしかいないと軽んじられるのだ。

しかし、それを家族に言いつけるような強さは持ち合わせなかった。それに魔法第一主義のこの国で自分の評価が低いのは仕方のないことだと思っていた。

エブラム王国で唯一の王子であるハビエルは、全令嬢が結婚したい憧れの相手だった。そんな彼の婚約者が自分だなんて。皆が納得できるはずがない。

なので、いつものことだと聞き流していたが、ハビエルは不機嫌そうに眉を寄せた。

「どうやら……ここは空気が悪いらしい」

ハビエルが周囲をギロリと睨みつけると、悪口はやみシンと静まり返った。先ほど嘲笑っていた令嬢たちは慌てて視線を逸らし、自分たちは無関係だというように取り繕った。

「ティーナ、向こうで話そう」

ハビエルはマルティナをスマートにその場から連れ出し、たくさんの悪意から遠ざけてくれた。

彼はいつも庇ってくれる。魔力量が乏しく世間的には劣等生である自分を、彼は婚約者としてとても大事に扱ってくれた。

「さっきは嫌な思いをさせたね。もうこんなことは二度と言わせないから」

「……いいえ、気にしておりません。いつも助けていただいてありがとうございます。わたくしな日本当はあなた様には相応しくありませんのに」

哀しげにマルティナが俯くと、ハビエルは肩にそつと手を置いた。

「あの者たちは知らないだけだ。君がどれほど素晴らしいかということを」

「……」

「悔しいが、君の良さがわかってもらえないのは私の力不足なのだ。もう少しだけ待っていてくれ。もちろん、何か困ったことがあればすぐに相談して欲しい」

ハビエルの力不足などではなく、彼に相応しい魔力量のない自分が悪いのだとマルティナは理解していた。

「ありがとうございます」

マルティナは全ての感情を押し込め、にこりと微笑んで見せた。優しい彼にこれ以上気を遣わせなくなかったからだ。

「一曲お相手していただけますか？」

「はい、喜んで」

ハビエルに誘われ、ダンスを踊った。楽しそうな二人のダンスはとても優雅で、空を舞う蝶々のように自由で美しかった。

「いつも思うけれど、ティーナはダンスが上手だね」

「殿下のリードのおかげですわ」

「それなら良かった。寝ずに練習した成果が出たようだ」

ハビエルはマルティナが動きやすいようにサポートしながら、ステップを合わせてくれる。

「ふふ、ご冗談を。殿下は元々お上手ではございませんか」

「ティーナの前では格好をつけたいから、いつも必死なんだよ」

彼は微笑んで、マルティナの腰をぐつと引き寄せた。途端に距離が近くなり、胸がドキドキとうるさく高鳴った。

「ティーナはいい匂いがするね」

彼の高い鼻が首筋に当たり、驚いてステップを踏み間違えそうになった。

「ひゃっ……！」

それをなんなくカバーして、ハビエルは何事もなかったかのようにダンスを続けた。

「私があげた香水かな」

「はい。この前、殿下にいただいたものを愛用しています」

マルティナは、ハビエルがプレゼントしてくれた香水を毎日使用していた。フローラルな香りだが、甘すぎず爽やかないい香りなのでとても気に入っている。

それに大好きな彼が贈ってくれたというだけで、この香水はマルティナにとって特別なものだった。

「オレンジの香りも混じっているね。これはティーナが作った精油の香りか」

「精油はヘアオイルに混ぜて使っているので残っているのかもしれませんが」

「そうか。これは私の一番好きな香りだ」

一番好きと言われて頬がぽつと染まった。何も自分のことを言われたわけではないのに、どうにも意識してしまうのはマルティナが彼を好きなせいだろう。

「ああ、もう終わりか。楽しい時間はあつという間だね」

曲が終わりハビエルはそつとホールドを解き、身体を離れた。すると終わった途端に、彼の周りにはたくさんの貴族令嬢が押し寄せてきた。

「ハビエル殿下、次はわたしと踊っていただけませんか？」

「いいえ。是非私とお願いいたします。私の方が殿下のお役にたてますわ」

「それならばわたしの方が！ わたくしはこの前新しい魔法を覚えしましたのよ」
美しく着飾った令嬢たちはマルティナがまるでいないかのように、押しのけてハビエルの前に出た。

「すまないが、私はマルティナとしか踊らないと決めているんだ」

彼ははつきりとそう言ったが、これくらいで怯むような貴族令嬢にはいない。ハビエルと結婚すれば、次期王妃なのだ。貴族令嬢にとってより条件のよい相手との結婚は、自分の幸せや家の繁栄のために必要なので皆も必死だった。

「まあ。殿下の婚約者のマルティナ様は、そんなにお心の狭い方ではございませんわ。ダンスはただの社交の一環ですもの」

豊満な胸を惜しげもなく披露し、ひと際派手な深紅のドレスと宝石を身にまとっているのは、ア

リソンだ。

彼女はバルバストル伯爵家という最近急速に力をつけてきた家の令嬢だが、この国で一目置かれるほどの能力を持つ魔法使いである。アリソンより家格の高いマルティナがいなければハビエルの婚約者は彼女だったのではないかと噂されていた。

「ねえ、マルティナ様？」

長いまつ毛を伏せ、勝ち誇ったようにこちらを見下ろす。その瞳にはあからさまな圧が込められていた。

ここでマルティナが断れば『王太子の婚約者はダンスも許さない狭量な女』だとレッテルを貼られるだろう。婚約者の評判はハビエルの評判にも関わるため、ここは大人しく引くのが正しいだろう。

「もちろんですわ。殿下、わたくしは友人のところへ行ってきます。皆様とどうぞお楽しみくださいませ」

ニコリと余所行きよその笑顔を作り、彼の傍を離れることにした。

「マルティナ、待ってくれ」

ハビエルはマルティナを優先しようとしてくれたが、たくさんの令嬢たちによってその声は遮られた。

「殿下！ マルティナ様もそうおっしゃられていますし、向こうで私たちとの親交を深めてくださいます」

「いや、今夜は彼女と一緒に……」

「さあさあ、臣下との交流も大事ですわよ」

アリソンは強引にハビエルの腕を取り、他の令嬢と共に去って行った。マルティナはその様子を見つめながら、もやもやとした気持ちを顔に出さぬように耐えた。

——誰も殿下に触らないで欲しい。

自分がそう思うのは醜い嫉妬だ。彼女の言う通り、社交界ではダンスや他の家の者との談笑は当たり前のことであり本来妬くようなことではない。だがどうしても優秀なハビエルと釣り合う程の魔法を使える彼女や他の令嬢の方が、自分よりも彼の婚約者に相応しいのではないかと思うってしまうのだ。

「わたくしは消去法で決まったのですものね」

ハビエルの婚約者選びは難航したと言われている。王家と釣り合う家格の未婚の令嬢は自分しかいなかったが、そのマルティナには魔力がほぼ無かったためである。使える魔法や魔力量は子にも遺伝する確率が高い。なので王家の人間は優秀な魔法使いと結婚して血をより良きものにすべきという考えが一般的であり、いくら公爵の娘であってもマルティナが『王太子妃として相応しい』とは誰も思わないのだ。

だが、マルティナに決まった。なぜかと言えば、マルティナが由緒正しいペドロサ公爵の娘だからだ。父は宰相としてこの国の実権を握る最強の火の魔法使いであり、母は風、兄は水、姉は癒しの魔法を使う一流魔法使いだ。いくら王家でも、この全員を敵に回すのは厄介なので、ハビエルと

マルティナを結婚させて取り込むという思惑なのではないかと言われている。

マルティナがぼんやりしていると、きやつきやという色めき立った声が聞こえてきた。

「まあ、ユベール伯爵のご息男」

「まだお若いのに素敵だわ」

「男らしい方なのに、舞踏会に慣れていらつしやらない様子が可愛いわ」

ハビエルが現れた時ほどではないものの、ある場所にだけ人だかりができていることに気がついた。たくさんの令嬢に囲まれて一人の令息が困っていた。

「あれは……コリンヌ様の弟君だわ。たしか名前はアルバン様だったかしら」

魔法学校で同じクラスの令嬢コリンヌは、マルティナを見下したりしない数少ない大切な友人であった。

——そういえば、この前弟君が十五歳になったから社交界デビューをしたと仰おしやっていたわね。昔お会いした時より、ご立派になられたわね。

十五歳とは思えないほど背が高くワイルドで凛々りんりゃしいその風貌は人の目を惹ひき、いきなり現れた優良物件に貴族令嬢が群むらがっている。

「あの……俺は……」

誘いをスマートに断ることも出来ず、上手な逃げ方もわからない彼がどんどん青ざめていくのがわかった。周囲を見回したが、どうやらコリンヌは近くにはいないらしい。マルティナはまた令嬢たちに嫌われるなと思いつつも、放置するわけにもいかずアルバンに近づいていた。

「皆さま、ごきげんよう」

そう声をかけると、アルバンに群がっていた令嬢たちが一斉に彼の傍から離れた。ハビエル狙いの令嬢に比べると、まだ若い令嬢ばかりだ。

「マルティナ様……!」

「少し、アルバン様とお話しさせていただいてもよろしいかしら？」

「も、もちろんでございます」

マルティナが現れたことで、皆は一斉にその場を離れて行った。小声で『殿下だけでなくアルバン様まで独り占めなんて』という悪口が聞こえたが、素知らぬ顔をした。

「お久しぶりですわね。以前より遅しくなりましたわ。お姉様にはいつも仲良くしていただいておりますの」

「は、はい。俺も姉上からマルティナ様のお話はよく聞いております。助けていただいておりますとうございました」

アルバンはほつとしたように眉を下げ、頭をさげた。その様子が捨てられた子犬のようで、庇護欲を掻き立てられた。マルティナに弟はいないが、いたらきっとこんな感じ方なのだろうなと思った。

——騒ぐ令嬢方の気持ちが変わるわ。

男らしいのに可愛らしいというギャップは、何ともいえない彼の魅力だろう。

「わたくしは何もしておりません。慣れぬ間は大変ですが、舞踏会をお楽しみくださいませ」

マルティナがニコリと微笑むと、彼は頬を染めそわそわし始めた。

「あ、あの。マルティナ様、俺まだ練習でしか踊ったことがなくてですね」

「まあ、そうでしたの」

「だから、その……ご迷惑でなければ、俺と一緒に……」

アルバンが何か言いかけた時、後ろからぐつと腰を引き寄せられた。マルティナが驚いて振り返ると、そこにはハビエルが立っていた。

「ひゃっ……！」

「ティーナ、ここにいたのか。捜したよ」

彼は頬が触れるほど近付き、甘い声でそう囁いた。公の場では『マルティナ』と呼ぶ彼が、人前で『ティーナ』と愛称で呼ぶのは珍しい。あまりに近すぎる距離に、体温がどんどん上がっていく。

アルバン目当てだった令嬢たちも、いきなり現れた王太子に色めき立っている。

「ハ、ハ、ハビエル殿下!？」

「こちらは？ 友人のところに行くと言っていなかったかい？」

笑顔ではあるが、なんだかハビエルは機嫌が悪そうである。彼の瞳には圧があり、さっきやつとリラックスしたアルバンはまたカチンと緊張していた。

これではいけないと思い、慌てて彼にアルバンを紹介した。

「ユベール伯爵の御子息のアルバン様ですわ。わたくし、彼のお姉様であるコリンヌ様と懇意にさ

せていただいていますのでご挨拶をと思ひまして」

「ああ、そうか。君が優秀だという噂は聞いているよ」

「殿下に知っていただけているなんて光栄です」

「よろしく。君には期待しているよ」

「ありがとうございます！」

王太子に気にかけてもらえることは、社交界ではとても意味があることだ。

「ティーナ、向こうで母上が呼んでいるから一緒に来てくれるかい？」

「はい。もちろんですわ」

「ではアルバンくん、失礼するよ」

ハビエルは腰に手を回したまま、マルティナをその場から連れ去った。腕を持つエスコートよりも、密着度が高いのでどうしてもドキドキする。

「……アルバン・ユベールか。油断も隙もない」

「え？」

「何でもないよ。母上はティーナと話すのを楽しみにしているから早く行こう」

「わたくしも王妃様とお話しするのが大好きです。この前もお茶に誘っていただいたのですよ」

どうやら彼は、王妃が探しているのでマルティナを呼びに来たようだ。ありがたいことにハビエルの両親は、魔力の少ないマルティナを厭うことなく自分の娘のように可愛がってくれる。

「……母上ばかりずるい。今度私ともお茶をしよう」

「え？ ずるいだなんてそんな」

「良いお菓子を見つけたんだ。ティーナもきつと氣にいたと思うよ」

「はい。とても楽しみですわ」

忙しいハビエルが王太子の政務の合間に時間を作って、わざわざ逢う時間を作ってくれることがとても嬉しかった。

「約束だよ」

完璧な彼と自分が釣り合っていないことはわかっていた。だが、愛する人と結婚できるのであれば周囲から認められるように頑張ることは全く苦ではなかった。

第二章 お茶会

「マルティナ様、発音が違います」

「……申し訳ございません」

「あなた様は、将来我がエブラム王国の王妃になられるのですから失敗は許されせん」

「はい。承知しております」

「では、もう一度」

マルティナは学校の授業を終えた後、王宮で語学の講師に定期的にレッスンを受けている。

今は友好国の言語の勉強だ。現在マルティナは母国語に加え三つの言語を習得しているが、ハビエルと結婚するまでもうひとつ新しい言語を覚える必要がある。

しかし、マルティナが受けるレッスンはこれだけではない。ダンスにピアノ、そして自国の歴史や政治についての勉強もある。これでも歴代の王妃が受けてきたレッスンに比べると少ない方なのだ。

なぜかという、魔力が少ないため魔法のレッスンは免除されているからだ。これはあまりに才能がないため『やつても無駄だ』と判断されたようだ。

ちなみにこれまでの王妃たちは家格が高いのはもちろんのこと、有能な魔法使いばかりだ。

実は、そんな自分にも得意な魔法が一つだけある。

けれどそれはとても特殊なもので、他人に悪用されぬよう家族や一部の使用人以外には使えることすら秘密にしていた。

だが、そんな事情を抜きにしても魔力量が少ないことは紛れもない事実だった。

魔法を使える人間がもてはやされるエブラム王国で、魔力量の少ない自分は王太子に相応しい結婚相手とはいえなかった。

——語学くらい頑張らないと。こんなことでは殿下に恥をかかせてしまうわ。

しばらくすると、コンコンコンと扉がノックされた。講師がどうぞと返事をする廊下から美しい顔がひょこりと顔を出した。

「先生、マルティナはそろそろピアノの時間ですよ」

そう言つてにこりと微笑んだのは、婚約者であるハビエルだった。ふわりと微笑んだ優しい表情を見ると、胸がドキドキした。

——嬉しい。殿下とお逢いするのは二週間ぶりだわ。

毎日のように王宮に来ているが、ほとんどレッスンで部屋に籠りつきりなので彼と逢うことは少ないからだ。

「ああ、本当ですね。では、今日はここまでにしましょう。マルティナ様は文法に関しては問題ありませんので、明日からは会話中心でレッスンを致しましょう」

講師はちらりと時計を確認し、語学レッスンは終了した。王妃教育はきつちりとスケジュールが

組まれているので、授業時間を延ばすということとはできない。

「先生、ありがとうございます」

お礼を伝えると、講師は二人に「失礼いたします」と告げ部屋を出て行った。

「ティーナ、久しぶりだね。逢いたかったよ」

ハビエルは公の場以外では、マルティナのことをティーナと愛称で呼ぶ。その甘い響きは、彼の特別だという気がして内心嬉しく思っている。

それにハビエルはいつも真っ直ぐに気持ちを伝えてくれる。正直照れくさくもあるが、彼の言葉を聞くと胸がじんわりと温かくなる。

「はい。わたくしも……で、殿下にお逢いしたかったです」

逆にマルティナは自分の気持ちを表に出すのが苦手だが、なるべくハビエルの前では素直でいようと決めていた。だが、まだ彼を愛称で呼んだことはない。

『ティーナも私のことをハビと呼んでくれないかな?』

ハビエルがマルティナの呼び方を変えるタイミングで、彼から自分の名前も愛称で呼んで欲しいと頼まれたことがあった。

『そんな、畏れおおうございますわ』

婚約者とはいえ、王太子を愛称で呼ぶなんてとんでもないとすぐに断った。

『そう……か。じゃあ、結婚してからの楽しみにとっておくよ』

ハビエルは哀しそうに目を伏せた後、こちらに気を遣わせぬようにこりと微笑んだ。その傷付い

た顔を見て、マルティナの胸はズキリと痛んだ。二人きりの時だけでも彼をハビと呼べば良いのに、可愛くないことを言ってしまったと後悔した。

まだ勇気がでないけれど、いつか愛称で呼びたい。

——だめね。逢いたかったと伝えるだけで緊張して言葉が詰まってしまう。

彼のようにさらりと気持ちを伝えたいのに、上手く言葉にできなかった。

「ふふ、ティーナも私と同じ気持ちだったんだね」

そんな拙い言葉でも、ハビエルは目を細め嬉しそうに微笑んだ。彼のこんなに素敵な笑顔を知っているのは、婚約者である自分だけではないかと密かにそう思っていた。

「ハビエル殿下、名残惜しいですがわたしは次のレッスンに参ります」

せっかく逢えたのだからもつと話していたいが、悲しいことにそんな時間はなかった。

「そのことなんだが、実はティーナのピアノレッスンは休みなんだ。先生には急遽別の仕事が入ってしまつて」

「そうなのですか？」

マルティナは首を傾げた。先ほどハビエル自身が、もうすぐピアノの時間だと教えてくれたのに。「ティーナとお茶を飲もうと思つて迎えに来たんだ」

「え？」

「ピアノのレッスンがなくなったと知られたら、語学レッスンは延びてしまうかもしれないだろう？ 君との時間を確保するためには、絶対にそれは避けなければと思つてね」

彼はしーっと人差し指を口につけ、悪戯っぽくウインクをした。

「ええ！ じゃあ知つていてあえてあんなふうに仰つたのですか？」

「先生には秘密だよ。さあ、私の部屋に行こう」

ハビエルはすつとマルティナに腕を差し出し、エスコートをしてくれた。彼の腕をそつと掴むと、触れたところが熱くなった気がした。

たったこれだけで鼓動が速くなる。

ハビエルは慣習を重んじる王族であるため、エスコートやダンス以外ではマルティナに指一本触れることはない。そのため婚約していても、何も進展していなかった。

——手を繋いでデートをしたいな。

マルティナは自分がそんなはしたないことを考えていることに気がつき、恥ずかしくなった。

公爵令嬢として生まれた以上、清く正しい振る舞いをしなければならない。それに今は王太子であるハビエルの婚約者であるため、品位を損ねるわけにはいかない。

「さあ、どうぞ」

彼は自らドアを開けてマルティナを先に部屋の中に入れ、座る前は椅子をひいてくれた。もともと何をしても完璧な彼だが、さりげなくレディを気遣う振る舞いには隙が無い。

「ありがとうございます」

お礼を言つて、席に着いた。ハビエルは向かいの席に座り、使用人を呼んだ。

「お茶と何か甘いものを頼む」

「承知いたしました」

急な予定変更だが、使用人たちは連携の取れた無駄のない動きですぐに二人分の用意を始めた。

「私は今日は書類仕事ばかりだったんだ。とても疲れたから、ティーナがお茶に付き合ってくれてありがたいよ」

「お誘いいただけ嬉しいです」

ハビエルは今回のように『自分が疲れたから』と理由をつけて定期的にマルティナを休憩させてくれる。その優しい思いやりがとても嬉しかった。

王宮の使用人は教育が行き届いているため、魔力が乏しいマルティナにも失礼な態度をとる者はいない。いないが、良く思っていない者がいることは間違いない。

だからこそマルティナは、王宮では常に気を抜くわけにはいかなかった。なので王太子であるハビエルの声かけがあれば休憩もできるが、自分から休みたいと言う勇氣はなかった。

厳しい王妃教育を受け始めて半年が経とうとしているが、正直逃げだしたくなるほど辛いこともあった。だが、彼の温かさがあったからこそ、ここまで頑張ってこられたのだ。愛する人の隣に胸を張って立てる自分ではないと思う気持ちだけで、努力を続けていた。

「お待たせいたしました」

使用人たちはすぐに温かい紅茶の入ったティーポットとカップ、そして色とりどりの可愛らしいお菓子のつた皿を持ってきてくれた。

「殿下、ご確認を」

使用人は、目の前で毒の探知ができる魔道具を出し、テーブルに置いた。この魔道具は小型のライトのような作りで、ボタンを押して光を当てると毒の有無がわかる。魔道具はとても希少で高価だが、魔力を持たない者でも使える優れものだ。

「青だね。もう止めていいよ」

青は無毒、赤は有毒の証。王家の人間が食事をする際は、必ず食べる前に本人の目の前でこの確認をするように定められている。婚約した日からマルティナも王族に準ずる扱いになったため、たとえ自分だけだったとしてもこの作業は行われる決まりだ。

幸いマルティナは魔道具の光が赤色になるのを見たことはない。しかし、王妃教育の中で過去には実際に毒殺された王族もいると教えられ、王宮内でも気を抜かないようにと言われている。

——何もなくて良かった。

安心したマルティナは、並べられたお菓子を見て目を輝かせた。それらはどれも若い令嬢の間で人気の店のものだったからだ。

——わあ……素敵！ わたくしに似合わない可愛いお店だから、行くのを諦めていたのに。

マルティナがじつとお菓子に見惚れてみると、ハビエルがぐすりと笑った。彼に見られていたことに気が付き、子どもっぽいことをしてしまったと思ひ恥ずかしくて頬を染めた。

「……すみません」

「なぜ謝るんだい？ 可愛いなと思っただけだよ」

ハビエルに可愛いと言われ、さらに体温が上がった。社交辞令だと頭ではわかっている。わかっ

てはいるが、実際に言われるとつい喜んでしまうのは自分が彼を好きないだろう。

「ありがたい。あとはこちらでするから君たちは下がってくれ」

ハビエルは使用人たちを部屋から退出させると、自らティーポットに手をのばした。

「殿下、いけません。わたくしがやりますわ」

マルティナは慌てて立ち上がり、ハビエルの手を止めようとした。王太子に給仕をさせるなんてことがあってはならない。

「ティーナは頑張りすぎだから、私の前ではゆっくり休んでいて欲しい」

「でも」

「いいんだ、私がやりたいんだよ。それにティーナはこの後も歴史のレッスンがあるだろう？」

「はい。でも殿下だってまだ政務が残っていらつしやるはずです」

「私はいつものことから平気だよ。二人でいる時くらいは、君にゆっくりして欲しいんだ」

「……ありがたいです」

彼は美しい所作で紅茶を注ぎ、ティーカップを差し出した。

「どうぞ」

「恐れ入ります。いただきます」

紅茶を一口飲むと、ふわりと良い香りが鼻に抜ける。

「美味しいです。ありがとうございます」

「よかった。お菓子も遠慮なく食べてくれ」

「はい」

どんなに王妃教育が大変でも、マルティナは優しくて思いやりのあるハビエルとの結婚をやめた
いと思ったことはなかった。むしろ彼との将来のためなら、いくらでも頑張ることができた。

「三カ月後にはディアナお姉様の子どもが生まれるのでとても楽しみです。この前会に行った時
は、もうだいぶお腹が大きかったですわ」

「確か君の姉上は騎士団長に嫁いだのだったな」

「ええ、貴族社会では珍しい恋愛結婚なんですよ。お義兄様はディアナお姉様に一目ぼれだったの
です。今でもとても仲良しで羨ましいですわ」

大きなお腹を撫でながら微笑んでいるディアナの姿を思い出し、幸せな気分になった。恋愛結婚
とはいえ、騎士団長は魔力も家柄も申し分ない人だったためなんの障害もなく結婚した。

ハビエルとはお互いの両親が決めた縁だが、それでも姉夫婦のようにいい関係を築いていきたい
と考えていた。

「私だって君に……」

ハビエルの声が聞こえ、自分がぼんやりしていたことに気がついた。

——いけない、殿下の言葉を聞き逃してしまったわ。

「申し訳ございません。殿下、なんと仰いましたか」

「いや、何でもありません。では姉君のご出産に合わせてレッスンをまとめて休みにするんだね」

「はい！ もうすでに調整をしていたいています」

「……そうか。元気に生まれてくるように私からお見舞いを送ろう」

マルティナが正式に王太子妃になれば、今のように家族と過ごすことはできなくなる。

父親であるエイダンよりも、地位が上になるからだ。公の場では親といえどもマルティナに対し敬語を使わねばならないし、生家にも頻繁には帰れなくなるだろう。なので、今はできるだけ家族と過ごす時間を大切にしていた。

そんなふうにお互いの近況を話し一時間ほど経過した頃、彼は時計をちらりと確認したため息をついた。

「ああ、楽しい時間はすぐに過ぎてしまうね」

マルティナも全く同じことを考えていた。彼と話している時間は、いつも楽しくてあつという間に終わってしまう。

「どうせならこの調子ですぐにあと半年が過ぎてくれたらいいのだが」

「どうしてですか？」

まだ王妃教育の途中なので、マルティナはあまり早く時間が過ぎるのは困るなど考えていた。

半年後には、ハビエルとマルティナの結婚式が予定されている。二人の婚約期間は王家の決まりに則り一年間と定められているので、今はやつと折り返しを過ぎたところだ。

「私は早くティーナと夫婦になりたいからね。世界中の時計を結婚式の日まで進めたいくらいだよ」

「わ、わたくしも早く殿下と夫婦になりたいです」

頬を真っ赤に染めながら、小さな声で答えた。

「……ティーナは、私と夫婦になるのがどういうことか本当にわかってるのかな？」

ハビエルの声がいつもより少しだけ低くなり、彼の深い海のような美しいブルーの瞳がこちらを真っ直ぐ見つめた。

「もちろん理解しております」

「そ、そうか。それなら……いいのだが」

ハビエルは急に口元を手で隠し、視線を逸らした。きっと彼は『王太子妃になる覚悟』があるのかを結婚前に訊ねたかったに違いない。

「はい！ 微力ではございますが、わたくしの持てる全てで殿下をお支え致します。魔法はどうにもなりません、書類仕事は得意ですでお任せくださいませ」

そう伝えると、彼はゆつくりとこちらに視線を戻し大きなため息をついた。

「夫婦とは……そういう意味ではないのだが」

「え？ ではどういう意味でしょうか？」

マルティナは首を傾げながら質問したが、返事はなかった。

——何か間違ったことを言ってしまったかしら？

いつも穏やかで優しいハビエルだが、なぜかこの時は怒っているように見えた。

マルティナは彼の見たことのない表情に戸惑っていた。そんな重くなった空気を壊してくれたのは、部屋のノック音だった。

「……どうぞ」

「失礼いたします。殿下、そろそろお時間です」

「わかった。すぐに行く」

マルティナだけではなく、ハビエルも王太子として多忙な日々を送っている。どうやら彼の方が先にタイムリミットがきたようだ。そのことに内心ほっとした。

「お茶に付き合ってくれてありがとう。これから会議に出なければいけないんだ」

「そうでしたか。ご無理なさらずにしてくださいませ」

「ありがとう。でも、これが王太子の務めだから仕方がないさ。むしろ私と婚約したせいで、ティーナにはたくさん負担をかけているね。すまない」

「いいえ、とんでもないことです」

「今度の舞踏会も楽しみにしているよ。ティーナも歴史のレッスン頑張つてね」

彼はいつも通り優しく微笑み、軽く片手を挙げて颯爽と部屋を後にした。

——さっきのは、きつと勘違いね。

美しく華やかな顔立ちのハビエルは、無表情になると怒っているように見えることがある。マルティナは、彼が公の場では常に微笑んでいるように見えるよう心がけていることを知っていた。

「きつと殿下も疲れていらつしやるんだわ」

マルティナはハビエルを少しでも支えられるようにさらに努力しなければいけないと決意し、歴史のレッスンに向かった。

第三章 魔法学校

エプラム王国では、魔力持ちの人間は十二歳になると魔法学校に通うことが義務付けられている。通常は二十歳で卒業となるが、婚姻や仕事が決まった場合は退学が認められていた。マルティナも半年後にはハビエルと結婚して王宮入りするため、辞める予定になっていた。

魔力量の少ないマルティナにとって、学校は楽しい場所ではなかった。この学校に通うのは大半が貴族の令嬢や令息たちである。本来ならこの学校生活を通して親交を深め、家に有利な人脈を広げなければいけない。だが、魔法至上主義のこの学校では、マルティナは落ちこぼれであり、友人も片手で数えられるほどしかいなかった。

「また入ってるのかしら」

マルティナは毎朝学校に着くと、いつもする作業がある。それは自分の机の中に入っている手紙を処分することだ。そつと机に手を入れると……やはり何か入っている。

ちなみにこれまで手紙に良いことが書かれていたことはない。見ずに捨てればいいだけなのだが、そうすると何が書かれていたのが気になって夜眠れなくなってしまう。

マルティナは常に公爵令嬢として恥ずかしくないように、心掛けて暮らしていた。そのため何が起きてても外では毅然とした態度をとっているが、本当は小さなことでも気になる性格だった。

見たわけではないが、見るしかない。意を決して封筒を開け、中身を取り出した。

『この国の宝であるハビエル殿下の価値を下げているのはお前だ。命が惜しければ婚約者を辞退しろ』

——わたくしが……殿下の価値を下げている？

マルティナはその文字を見て、血の気が引いていくのがわかった。

今までの手紙は『王太子妃に相応しくない』とか『魔力なしのくせに出しゃばるな』とか『家柄だけの女』などマルティナ自身のことが悪く書かれているだけだった。

だが、ハビエルのことが書かれていたのは今回が初めてだ。マルティナが周囲から批判されることはあっても、彼はいつも皆の尊敬の対象だった。

なのに今回は、ハビエルを悪く言っている。

——わたくしが婚約者だと……殿下に迷惑がかかってしまう。

それからただけぼんやりしていたのか。教室の中に同級生の令嬢コリンヌが入ってきた。

「マルティナ様、おはようございます。相変わらずお早いですね」

「え、ええ。少し予習をしたくて」

マルティナは慌てて手紙を制服のポケットに押し込んだ。いつもなら誰もいないうちに手紙を細かく千切^{ちぎ}つてゴミ箱に捨てるのだが、タイミ^ちングを失ってしまった。

「まあ、学年トップのマルティナ様がまだ予習をなさるの？」

「……わたくしは座学しかできませんから」

力無く視線を下げると、コリンヌが目の前まで近づいて来た。

「マルティナ様！ あなたは素敵な方ですわ。真面目でお優しくてご聡明で……良いところばかりです。魔力は生まれつきのものですもの。気にすることはありませんわ」

「ありがとうございます」

「いいえ、本当のことですもの。この間も弟のアルバンを助けてくださったではありませんか。あの子がとても感謝しておりましたわ」

裏表のないコリンヌに励まされ、マルティナは心が救われた。だが、同じ普通クラスとはいえ彼女の魔力量は自分の何倍もある。

自分が他のことを必死に頑張っても、その事実だけは変わらないことが苦しかった。

「おはようございます」

他の生徒も登校してきたので、手紙の処分は後ですることにした。

全ての授業を終えると、マルティナは慌てて帰る準備を始めた。今日も王妃教育のレッスンがあるため、一旦屋敷に戻って制服からドレスに着替えねばならないからだ。

「あら、誰かと思えばマルティナ様じゃありませんか」

前から聞こえてきた嫌味な声に、心の中でため息をついた。

——ああ……嫌だな。また悪口を言われるのかしら。

制服に似合わない華美な髪飾りと派手な化粧をしているのは、特別クラスの生徒であるアリソン

だった。

彼女はマルティナがハビエルの婚約者になった頃から、ずっと嫌がらせをしてくるのだ。それは舞踏会でも学校でも変わらない。

「申し訳ありません。あなた様があまりに地味なので、全く気が付きませんでしたわ」

取り巻きの令嬢たちと一緒に、見下すようにくすくすと笑いだした。

マルティナは学校に通うときは控えめな化粧で、シンプルな髪飾りしか使わないと決めている。それはたとえ王太子の婚約者であっても、この学校内では身分を問わず皆が同じ立場の生徒だと示す意味があった。

「失礼いたします。わたくし、急いでおりますので」

自分の弱気なところを彼女に見せないように、そのまま通り過ぎようとした。

「ちよつと待ちなさいよ！」

歩き出そうとした瞬間、強い風が足元に吹きマルティナは体勢を崩した。

「……っ！」

なんとか地面に手をついて、顔を打ちつけるのを免れた。だが、制服のスカートは土で汚れてしまった。

「あらあ、ごめんなさい。私、魔力が多いからつい魔法が出てしまいましたわ」

アリソンがわざと魔法を使ったのだと分かったが、周囲には彼女の取り巻きしかいないのでマルティナを庇ってくれる者は一人もいない。

それにこれくらいのことを大げさに騒ぎ立てたりしたら、王太子の婚約者として恥ずかしい。

「でも普通ならあの程度の風、魔法で転ぶのを防げますわよね？ まさか殿下の婚約者であるあなたがそんなこともできないなんて、思ってもみませんでしたわ」

確かに普通レベルの魔法が使えれば、先ほどの風で転んだりはしないだろう。だが、マルティナにはできなかった。

「……そうですね。アリソン様とは違い、わたくしには至らぬ点が多くお恥ずかしい限りです」
情けなくて泣きそうになるのをぐっと堪え、まるで傷ついていないかのように装った。

「ふふ、頭だけはいいのね。自分の立場がよくわかりなこと」

アリソンは口角を上げ、地面に膝をついているマルティナを見下ろしていた。

——悔しくても、弱みをみせてはだめだわ。

マルティナは覚悟を決めた。彼女をじっと見つめたまま立ち上がり、スカートについた土をはたいた。

「我が国にあなたのような優秀な魔法使いがいて、殿下もわたくしも嬉しく思っております」

にっこりと笑顔を作ると、アリソンの目は吊り上がり頬が赤く染まった。

「では、ごきげんよう」

美しいカーテシーをし、その場を離れようとした。しかしアリソンはすぐに追いかけてきて、肩を掴み顔を近付けた。

「まだ御用があるのですか？」

「あなたなんて消去法で選ばただけよ。他の公爵家に殿下と同世代の令嬢がいなかっただけ。でもこの国で本当に価値があるのは魔法よ！　誰もあなたみたいな家柄だけ良い役立たずを、王太子妃として認めないわ。覚えていらっしやい」

マルティナはできるだけ冷静にそう伝えた。消去法で決まった婚約者であることはわかっていても、ハビエルを好きになってしまった今ではこのポジションを誰かに渡すわけにはいかない。

「魔力で選ばれるのなら、絶対に私だったはずよ。なんで……なんで劣等生のアঁたなんか！ 私が顔も魔力も完璧なハビエル殿下と結婚して王太子妃になるはずだったのに」

アリソンは唇を噛み締めた後、悔しそうにそう吐き捨てた。彼女はハビエル自身を好きというよりは、王太子妃という地位を手に入れたいようだ。いくら魔力が多くても、そんな人には負けたくなかった。

殿下の良いところは顔でも魔力でもないのに。

「わたくしはこれから用事がありますので」

マルティナがそう言うと、アリソンは馬鹿にしたようにフツと鼻で笑った。

「最後にいいことを教えてあげるわ」

「私、今度ハビエル殿下に食事に誘われているの。お父様も一緒にね」

「わたくしは殿下のお仕事に口を出すつもりはございません」

二人きりで会うのであれば問題かもしれないが、彼女の父親が同伴なら政務の延長だろう。

王太子であるハビエルは様々な貴族たちと交流を持っている。たとえその場に令嬢がいたとしても、それをいちいち咎めるべきではない。仕事は仕事だ。

それに、殿下が浮気をするなんて考えられないわ。

疑う余地もないほど、ハビエルはマルティナに対してとても誠実だった。

「ふふつ、やっぱり知らないのね。お可哀想に」
アリソンは勝ち誇った顔で、ニヤリと意地悪く口角を上げた。

「……？」

「殿下はマルティナがいない時に王宮において誘ってくださいましたのよ。聡明なマルティナ様ならこの意味は分かるわよね？」

「え？」

「とつても楽しみだわ。ああ、こんなことしている場合じゃないわね。約束の日までまだ時間があるから、お父様にお願いでドレスも新調しなきゃ！」

きやつきやと騒ぐアリソンの高い声が、周囲に響き渡っていた。

彼女は嘘をついたに違いない。そう思いたいのに。

——どうしてわたくしがいない日に？

やましいことがないのであれば、マルティナが王宮にようがいまいが関係ないはずだ。なのにわざわざいない日を指定して、彼女とその親を呼ぶ意味はなんなのだろう。

「とびきりセクシーなドレスにするわ。あなたのその薄い身体じゃ殿下は満足していらっしやらないでしょうし」

アリソンの身体は見事な曲線美を描いている。彼女は舞踏会ではいつも露出の多いドレスを着ていて、多くの貴族令息たちがその豊満さに釘付けになっている。

マルティナはというと、胸は控えめで手足が長くすとした凹凸の少ない身体だ。つまり、彼女と自分を見た目も性格もすべてが正反対だった。

「失礼なことを仰らないでくださいませ。殿下は未婚の令嬢に手を出すような方ではございません」毅然とした態度で言い返したが、彼女はさらに馬鹿にしたように笑い出した。

「まあ、まさか半年も婚約者をしていて何もないと言うの！ 殿下があなたに手を出さないのは、あなたに魅力がないだけよ」

「殿下はわたくしを大切に……」

「殿下は好きな女の前なら理性を忘れるものよ。ふふ、なんだか安心したわ。私が先に殿下の子を身籠れば、王太子妃は私になるわね」

急にご機嫌になったアリソンは、取り巻きを連れてこの場から姿を消した。

マルティナがとぼとぼと馬車まで歩いて行くと、侍女のケイトが驚いて駆け寄って来た。

「お嬢様、その制服どうなさったのですか！」

「ぼんやりしていて転んだの。馬車を汚してごめんなさい」

「そんなことはどうでもいいことです。お怪我はございませんか？」

「ええ、大丈夫よ」

身体は痛くないが、心が痛い。朝から嫌な手紙を読み、帰りはアリソンに遭遇してしまった。

——魅力がないから触れない……か。

今まではハビエルがエスコート以外で触れないのは、大事にされているからだと思っていた。だが、アリソンの話を聞いて急に不安になってきた。

——もしかして、殿下はわたくしに興味がないのでは。

ああ、今日はだめだ。何を考えてもネガティブになってしまう。

「お嬢様、もしかして誰かに嫌がらせを受けたのではありませんか？ そうであれば旦那様に報告する必要があります」

「いいえ、自分で転んだのよ」

「しかし……」

ケイトの心配そうな顔を見て、マルティナは力無く微笑んだ。幼いころからずっと世話をしてくれる彼女には、きつと無理をして笑っていることがわかつているのだろう。

「大丈夫よ。帰ったらすぐにシャワーを浴びて、支度をして王宮に向かうわ。ケイト手伝ってくれる？」

「わかりました」

「助かるわ。ありがとう」

これ以上聞かないで欲しいという意思表示を込めて、話を強引に変えた。

第四章 本当の気持ち

王太子妃教育のために王宮に来たマルティナだったが、学校でのが気になる終始集中力を欠いていた。

「マルティナ様。申し訳ありませんが、政治の先生が体調不良で来られないそうです」

「まあ。先生は大丈夫なの？」

「少し疲れが出ただけと聞いております。よろしければ次のレッスンまで時間がございますので、お茶はいかがでしょうか」

にこりと微笑んだ彼女は王宮の侍女だ。落ち着きがあり、以前王宮内で見たことがある。きつと長く^{づか}仕えている者なのだろう。

「いいえ、結構よ。今日習うはずだった内容を予習しておきたいから」

侍女の提案を断ると、彼女は一瞬無表情になった後に笑顔を作り直した。

「……マルティナ様、恐れながら申し上げます。実はハビエル殿下があなた様のために購入されたお菓子をご用意しています。お食べになった方が殿下はお喜びになれるはずです」

「そうなのですか？ ではそれは全てのレッスンが終わった後にいただき……」

「だめです！ 今でなければいけませんわ」

食い気味に言葉を遮られ、マルティナは違和感を覚えた。お菓子を食べなければいけない理由があるのだろうか？

「どうしてですか？」

「い、一番！ そう、一番いい状態で召し上がっていただきたいからです！」

その侍女があまりに必死な様子なので、これ以上断るのは気が引ける。マルティナは、仕方なくお茶の時間を取ることに決めた。

「ありがとうございます」

「すぐにご用意させていただきますね」

マルティナが返事をする五人の侍女が部屋の中に入り、代わる代わる準備をしてくれた。ペドロサ公爵家も使用人や侍女が多いが、王宮はそれ以上だ。自分一人のためにこんなに侍女がいるのは申し訳ないが、王太子妃になる以上は慣れるべきことなのだろう。

「マルティナ様、ご確認をお願い致します」

先ほど声をかけてくれた侍女は、ワゴンの上ののったティーポットやカップ、そしてお菓子に向けて魔道具の光を当てた。

「青ね。もう下げていいわよ」

「はい。冷めないうちにどうぞお召し上がりください」

侍女は魔道具をポケットにしまい、丁寧に紅茶を注ぎ、カップをテーブルに置いた。

「ありがとう」

マルティナが礼を伝えると、別の若く可愛い侍女が菓子を差し出した。こちらの侍女は、初めて見る顔だった。

「こちらはハビエル殿下からです。マルティナ様はこの店のお菓子がお好きだと伺っております」

「まあ、嬉しいわ」

ハビエルがマルティナのことを、王宮の侍女たちに話してくれていたことが嬉しかった。

「あっ……うわぁ!」

にこにこ笑って話していた若い侍女が、皿を置く寸前にバランスを崩した。菓子はテーブルに散らばり、紅茶の中にも落ちた。

「きゃっ!」

飛沫^{しぶき}があがり、マルティナが悲鳴をあげると、侍女たちは顔面蒼白で駆け寄って来た。

「マルティナ様、火傷^{やけど}をなさっていませんか？」

「お召し物は大丈夫でしょうか」

皆はバタバタとマルティナが無事かを確認してくれたが、ドレスに紅茶が数滴跳ねた程度だった。

「ええ、平気よ。驚いただけだから心配はいらないわ」

「申し訳ございません。本当に……なんとお詫びすればよいか」

失敗した若い侍女は、何度も深く頭を下げた。

「大丈夫よ。あなたは怪我をしていない？」

マルティナは優しく声をかけ、若い侍女の身体を案じた。

「はい。本当に申し訳ありません」

「あなたが無事でよかったわ」

マルティナはそう伝えたが、最初に話しかけてくれた侍女が眉を吊り上げものすごい剣幕で怒り始めた。

「あなた何をしているのですか。マルティナ様にこんなことをして。決して許されることはありませんよ!」

「……申し訳ありません」

「貴重な紅茶を台無しにして。この役立たず!」

——さっきとはまるで別人だわ。

マルティナはそれ以上はどうしても聞いていられなかった。

「もうおやめなさい。下の者の失敗を正し、良い方に導くのが上位にある者の務めですよ」

「……ですが」

「次回から気をつければよいことです。わたくしは怪我などなかったのですから、彼女の処罰も望みません」

マルティナは怒られていた若い侍女の手を取り、穏やかに微笑んだ。

「この掃除をお願いしますか？ わたくしは着替えてまいります」

「はい、ありがとうございます」

「この失敗を糧^{かて}に、これから王家のために励んでくださいませ」

失礼しますとマルティナは退室したが、扉が閉まる直前、先程まで叱責^{しっせき}していた件の侍女^{くたん}が恐ろしい顔でこちらを睨みつけているのが見えた。その悪意が込められた鋭い目はとても不気味で、不安になった。

——彼女に嫌われている？

いや、あれはそんな目ではない。あの視線はよく舞踏会で向けられるような嫌悪ではなく、もつと存在自体を否定するような憎しみが込められていた気がした。

それに、あの侍女が『貴重な紅茶』と言っていたことも違和感を抱いた。

王宮で出される紅茶は常に一級品なので、貴重な紅茶には違いない。だが、それはあくまで一般社会ではの話であって、この王宮では先ほどの紅茶は当たり前前の飲み物だ。

もし普段と違う特別な紅茶であれば、カップを出す前に必ず茶葉の説明をするはずだ。だが、それがなかったということはいつもの紅茶で間違いないだろう。

そうなると、どちらかといえば貴重なのは菓子の方だ。あれはハビエルがマルティナのために用意してくれた人気店の焼き菓子で、なかなか買えるものではない。

——もしかして、あの紅茶の中に何か入っていたの？

今朝の手紙には『命が惜しければ婚約者を辞退しろ』と書いてあった。ハビエルのことが書いてあったことがショックで忘れていたし、ただの脅しだろうと本気にしてなかったのに。

マルティナの全身に鳥肌が立った。いや……でもそんなことはあり得ない。だって、自分は目の前で毒が入っていないことを確認しているのだから。だからこそ何の疑いもなく、紅茶やお菓子を

口に運ぼうとしたのだ。

考え過ぎだろうと思い直し、ハビエルが用意してくれている専用の部屋に向かった。

毎日授業後に遅い時間までレッスンを受けるため、気を遣った彼が『疲れたらいつでも休めるように』と王宮内にマルティナの部屋を作ってくれたのだ。クローゼットには彼から贈られたたくさんの特注のドレスがかかっており、いつでも着られる状態に整えられていた。

マルティナは部屋に着くと、王宮の侍女の手を借りて予備のドレスに着替えた。そして最後のレッスンへ向かった。

——今日はだめね。

全てのレッスンを終えたが、成果はいまいちだ。こんなもはやした気持ちではいけないと思い、早く屋敷に帰り復習をしようと考えていた。どうしようもないことを延々と考えるより、何かをしていた方が気が紛れるはずだ。

マルティナは馬車が待機している門に向かうために、王宮の裏側を通ることにした。王宮はとも広いため、ショートカットしないと時間がかってしまうからだ。すると、外からよく知った話し声が聞こえてきた。

——この声は殿下だわ！

どうやら魔法の稽古終わらしく、今はハビエルの側近であり幼い頃からの親友でもあるクラレンスと談笑しているようだ。二人は公の場では主従関係を崩さないが、誰もいない時はくだけた関係である。

——クラレンス様という時だけは、殿下は少し子どもっぽくなられるのよね。

実は前からそのギャップが可愛らしいなと思っていた。いつもしっかりしているハビエルがクラレンスの前だけでは、年相応の青年に見えるからだ。

そしてこのタイミングで逢えたことは運命だと感じ、声をかけようとした。きっと彼と直接話せば、この重たい気持ちは晴れると思ったからだ。

「ハビエ……」

「俺はこの前見合いをしたんだが、気分がのらなくてな」

クラレンスが肩を落としている姿を見て、マルティナは慌てて口を嚙み柱の陰に隠れた。

どうやらクラレンスは見合い相手がお気に召さなかったらしい。話の内容が内容だけに自分が聞いてはいけない気がしたので、残念だがこのまま声をかけずに帰ろうと思った。

「嫌なら断ればいいだろう」

「そうだが、俺たちの立場じゃ自由に選ぶってわけにはいかないだろ。魔力や家柄の問題もあるし。ハビエルもあと半年で結婚だが、本当にマルティナ嬢でいいのか？」

マルティナは自分の鼓動がどくどくと速くなっているのがわかった。彼が自分との婚約を本当はどう思っているのかを聞いてみたかったからだ。聞くのが怖い。だが、知りたい。

「良いに決まっているだろう。私の婚約者はマルティナ以外あり得ないさ」

「でもハビエルは昔から、結婚するなら優しく可愛いらしい子がいいって言ってたじゃないか」クラレンスは隣にいるハビエルを見て、^{からか}揶揄うようにニヤリと笑った。しかし、彼は素知らぬ顔で

無言を貫いている。

「あとはスタイルがいいのが好みなんだろう？」

そこまで聞いて、マルティナはショックでその場から動けなくなった。今まで聞いたハビエルの好み、自分とはかけ離れている気がしたからだ。

「そうだが」

「やっぱり理想と現実が違うよな。マルティナ嬢は綺麗だが、可愛いつて感じじゃないし。スタイルもスレンダーだぜ？」

「黙れ。私の婚約者のことを、お前にどうこう言われたくない。それに今までクラレンスに話していなかったが、マルティナは私の……」

話の途中だったがこれ以上聞くのはあまりに辛く、二人に気付かれないようにその場を離れた。マルティナは自分が意地悪ではないと信じているが、いつも公爵令嬢として毅然とした態度を心がけている。だから優しく穏やかと評されるような人間ではないと分かっている。

顔だつて可愛らしさはなく、どちらかといえば大人びている。ハビエルを愛称で呼ぶことも、自分から彼に甘えたりもしたことがないので性格が可愛らしいということもない。

そしてスタイルについてはクラレンスの言う通り。背が高く細身な上に胸は慎ましかった。つまり女性らしい曲線などマルティナには備わっていないかった。

——もしかして……殿下が手をお出しにならないのは魅力がないから？

マルティナはアリソンに言われた言葉を思い出した。触れられないのはずっと彼に大事にしても

らっていると思っていたが、全て勘違いだったのかもしれないと初めて気が付いた。きつと好みではない婚約者に、積極的に触りたいとは思えなかったのだろう。

「殿下はお優しいから義務を果たしていらっしゃっただけなのね」

マルティナはハビエルに邪険にされたことは一度もない。周りが魔力のことで心無いことを言ってきた時は、怒ってさりげなく守ってくれた。舞踏会があれば必ず素敵なドレスを贈ってくれるし、どんなに忙しくとも迎えにきてくれてエスコートもしてくれる。

いつもマルティナを励まし、優しい言葉をかけてくれるハビエル。それはきつと彼にとっては義務の一環だったのだろう。好みとかけ離れた令嬢であっても、親が決めたのだからと自分を納得させ婚約者としてきちんと扱ってくれただけなのだ。

——いいじゃない。貴族の結婚とは本来そういうものなのだから。

お見合いをして、好きでもない相手と結婚するなんてよくある話だ。下手をしたら顔も知らない方に嫁ぐなんてこともある。だから、何も聞かなかったふりをしてこのまま結婚してしまえばいい。だってマルティナはハビエルのことが好きなのだから。

この半年、涙が出るほど辛い王妃教育に耐えてきた。ウェディングドレスだって特注品で作ってしまったている。国民たちにも王太子の結婚は伝えられており、二人の結婚式の日から一週間は祝いの祭りが計画されている。それに……それに……他にも……マルティナは婚約を続ける言い訳を、頭の中で必死に考えた。

『マルティナ嬢、私は君と一緒にならよりよい国にしていけると思うんだ。いきなりの婚約話で驚い

ているかもしれないけれど、どうか力を貸して欲しい』

マルティナは婚約前の顔合わせの時にハビエルに言われた言葉を思い出していた。これはエブラム王国の宰相であり、有力な公爵で強い魔法使いである父親が『王家との繋がり』を狙って勝ち取って来た縁談だった。

国王としてもマルティナ以外の家族全員が才能ある魔法使いであるペドロサ公爵家と自分の息子を結婚させることで、王家の地盤を固めたいという狙いがあったのだろう。

だが、マルティナは不安だった。魔力の少ない自分が、王太子妃になれるはずがないと考えていたからだ。

『殿下、御存じの通りわたくしは魔力が少ないです。お父様がなんと言ったかわかりませんが、わたくしは殿下に相応しくありません』

『そんなことは問題ないよ。この国の民は魔法使い以外の方が多いのだから。それに私は魔法が得意なんだ。マルティナ嬢が苦手なものは私が、私が苦手なものはマルティナ嬢が支えてくれたら嬉しい。君の聡明さや、民を思いやる心は王太子妃になるに相応しいと思っっているよ』

ハビエルはそう言って魔力量の乏しいマルティナを責めることはなく、むしろ魔力以外の部分を認めてくれた。それからは、二人でどうすればエブラム王国がもっと良くなるかの議論を続けた。彼はマルティナの意見も真摯に聞いてくれる。それがとても嬉しかった。

その顔合わせをきっかけに、婚約を受けることを決めたのだった。

マルティナも毎日忙しく過ごしているが、それはハビエルも同じだ。社交界では完璧な天才だ

んて言われているが、本当は違う。彼は見えないところで、血のにじむような努力を続けていることをマルティナは知っていた。それもこれも『よい国を作る』ため。

——やはりわたくしではあなたの夢の邪魔をしてしまうようですわ。好きという気持ちだけでは、ハビエルの妻にはなれない。

将来国王になる彼を隣で支えたかった。だが、自分にはほとんど魔力がない。それならばと様々なことを必死で学んできたが、知識だけなら王宮には優秀な専門家がいくらでもいるし、頭が良く知恵を貸してくれる家臣たちもたくさんいる。

だからといって、マルティナでは政務で疲れたハビエルを癒すこともできない。

好みではない女に触れられては、さらに疲れが増してしまうだろう。優しいハビエルはマルティナを無下にもできず、今度は夫としての役割を果たそうと無理をするに決まっている。今までの自分分は、どれだけ彼の足枷あしかせになっていたのかと頭を抱えた。

——もう婚約破棄をするしかない。

マルティナから断れば、ペドロサ公爵家にお咎めがくるだろう。でもハビエルにも罰がくだってはいけないという難しいことをしなければいけない。

どうしたら彼と穏便に別れるかを考えた。嫌いだから別れるのではない。愛しているからこそ誰よりも幸せになつて欲しい。そのための婚約破棄でなくてはならない。

ぐるぐると考えながら屋敷に帰ると、玄関に父親のエイダンが現れた。この国の政治を担う宰相として働いている父が、日付が変わる前に屋敷に帰ってくることは珍しかった。

「ただいま帰りました。お父様、どうなさったのですか？」

「お帰り。そろそろマルティナが王宮から戻る頃かと思つて待っていたんだ」

「え？ わたくしに何か御用ですか」

「ああ。このまま私の書斎に來なさい」

「はい」

どうやらあまりいい話ではなさそうだ。気が重いまま父親の書斎に向かった。

「マルティナ、これはなんだい？」

部屋に入るなり、エイダン一枚の紙を広げて見せてきた。

「なんですかこの紙は？ わたくしは知りませ……あつ！」

マルティナは驚きの声をあげた。今朝捨てようとした脅しの手紙だったからだ。

——まずい、慌てていて捨てるのを忘れていたわ。

しかも知っている反応をしてしまったので、今更知らないふりはできない。

「どうやら心当たりがあるようだね。君の制服のポケットに入っていたと洗濯係が教えてくれたよ」

「そ、そうですか」

「使用人たちにはマルティナに何かあれば、すぐに私に報告するように言つてある。隠し事はしないように」

マルティナの父親は抜け目がない。婚約当初、ペドロサ公爵家に同じような手紙が匿名匿名で送られ